研究論文

日豪における外国とつながる人々の言語レパートリーの多様性とアイデンティティの事例研究
―言語能力・使用の自己評価の分析と言語政策への示唆―

倉田 尚美・村岡 英裕

キーワード：言語レパートリー、接触場面、言語管理、自己評価、アイデンティティ

要 旨

グローバル化にともない移民の背景は「超多様性」(Vertovec 2007) と呼ばれ、社会言語学的には、個人の言語レパートリーの多様性が注目されている。本研究では、こうした外国につながる人々が、ホスト社会との接触経験の中で、主流言語の能力及び使用に対してどのように自己評価し、またアイデンティティを形成しようとしているかをインタビューの語りから探り、彼らの言語レパートリー形成の一端を明らかにすることを目的とする。調査は日豪に住む外国につながる人々10名を対象にインタビューを行い、自己評価の語りと、さらにアイデンティティに関する語りについても抽出して分析を行った。調査の結果、自己評価の語りでは、日豪の相違よりも類似の傾向の方が強いことが明らかになった。またアイデンティティについての語りでは、ホスト社会との接触経験に密接に関連しているだけでなく、将来の言語レパートリー形成の方向が予想できることがわかった。このような個人レベルの言語レパートリーの調査は、移民に対する言語政策の具体的な指針を検討していく上で、重要な示唆を与えるであろう。

1. はじめに

グローバル化による人の移動は、先進国、発展途上国に限らず活発化しており、日本もまた例外ではない。出入国在留管理庁（2022）の統計によると、外国人在留者数が日本の総人口に占める割合は2パーセントを越えた。総数が増えるに従って多様な外国人移住者の存在が可視化されてきている。本研究では、以上のような日本社会と多文化社会と呼ばれるオーストラリア社会の外国につながる人々を比較し、彼らの接触経験の語りに現れる言語能力や言語使用の自己評価とアイデンティティを分析することにより、言語レパートリーの多様性を明らかにし、外国につながる人々に対する言語政策への示唆を得ることを目標とする。なお、本稿の考察の対象となる人々の名称については「外国につながる人々」を主に用いる。外国人移住者がどのようにホスト社会で居住するかは人によって、あるいはその時々で異なっている。出身地域との往復、他地域への再移動なども視野に入れながら暮らしている「移動する人々」も含めて、多様性を包摂する概念であると考えるためである。

2. 先行研究

本節では、接触場面における評価、そして評価に関連すると思われるアイデンティティについての先行研究の一部を紹介する。

日本語教育における評価研究では、日本語母語話者による第三者評価が注目されてきた。なかでも宇佐美（2008）は「日常生活の中で、常に他人の言語運用に対し「評価」という行為を行い、また自身の言語運用も他人からの評価を受けながら生活している」（同上、p.21）と指摘し、評価の重要さとともに評価に含まれる他者性を指摘している。

ホスト社会の主流言語に対する自己評価には他者評価が反映されることから、外国につながる人々の言語使用の社会的文脈と彼らのアイデンティティとの相互関係が多くの研究者に注目されてきた（e.g. Berry 1997：文化アイデンティティ、Bourdieu 1984：文化資本、Kurata 2011：言語学習）。中でもカナダにおける移民女性を研究した Norton（2000）は、第 2 言語話者の社会的アイデンティティの特徴を非単線的で矛盾があり、葛藤の場であり、通時的に変化するものである（同上、p.125）として、ホスト社会との交渉と深く関係しているアイデンティティの側面を重視した。さらに移民が何を目的に習得に投資しているか、彼らが周囲の人間との権力関係のなかで、どのように自らのアイデンティティを構築してきたか、など学習者と社会的文脈の関係から言語学習を分析する必要性を指摘している。

日本においても、外国につながる人々が周囲の環境と関わりながら構築するアイデンティティと複数の言語との関係が近年注目を浴びている。例えば川上・三宅・岩﨑編（2018）では、多様な背景をもつ人々がつながる複数のことばや国に対する認識が移動によってどう変容するのか（e.g. 岩﨑 2018；三宅 2018）、また彼らの複合的なアイデンティティの（再）構築（e.g. 倉田 2018；八木 2018）などを考察している。これらの研究では、接触場面におけるコミュニケーションを通して形成される「移動する人々」の社会認識やアイデンティティ、そして言語レパートリーを複合的、動的で不均質が常態と言う視点に立って捉えることの重要性を強調している。

村岡・ファン・高編（2016）は、日本ではニューカマー移民によるコミュニティ言語（Clyne 1991）の独自な発達はまだ限られており、「移動する人々」の将来的な言語変化や言語レパートリーの方向性を見い出すためには、日本語能力や日本語使用に対する自己評価の調査が有効であると指摘している。自己評価は接触経験のその時々において何が問題なのかを意識化した証であり、習得の目標や、言語使用の原則・ストラテジーなどの構築につながっていくものであり、最終的には言語レパートリーの変化につながると考えられる。

以上の先行研究から、本研究では日豪における外国につながる人々が自身のホスト社会の主流言語能力とその使用についてどう評価したかを分析する。さらに、その評価の語りと彼らのアイデンティティについての語りの関連について考察する。

3. 調査と分析の枠組

3. 1. 調査の概要

日本とオーストラリアの社会の背景は大きく異なる。日本における在留外国人数は 2021 年末の統計によると 276 万 635 人で 2000 年代、2010 年代に比べて増加しており、出身国の多い順では中国、韓国、ベトナムとなる（出入国在留管理庁 2022）。そうした増加傾向に対して政府により「定住外国人」を対象とした多文化共生政策（e.g. 総務省 2006、2019）がとられる一方で、外国人の権利に関しては大きな変化は見られていない（山下 2010）。最近になって 2018 年入管法の改正、2019 年の日本語教育推進法、2020 年の文科省による外国人児童生徒の教育の充実等、主として産業界の労働不足を背景に

した外国人に対する門戸の拡大にともなって定住外国人の施策がはかられており、今後、実質的に多文化共生が進行していく可能性がある。

一方のオーストラリアでは、国勢調査（Australian Bureau of Statistics 2021）によると、人口の約50%が移民・移民二世の出自をもち、家庭で英語以外の言語を話す住民が約20%で、都心部では30%を超す。1970年代半ばから多文化主義政策がとられ、80年代後半からLanguages other than English（LOTE）政策による日本語も含めた9言語の外国語、あるいはコミュニティ（日常生活）言語としての言語（教育）政策、また各州の政府によって、約300ある内の主要なコミュニティ言語への支援も広く行われている。オーストラリアにおける日本人在留者の増加も顕著で、過去約30年の間に日本人長期滞在者の数は4倍以上に、永住者は約10倍以上に増加し、ここ数年は、永住者数（59,293人）の方が長期滞在者数（34,158人）を上回る状況だ（外務省2022）。

以上のように、日豪の多文化へのアプローチは著しく異なっており、そうした言語政策、移民政策の違いによって、外国につながる人々の自己評価とアイデンティティに関する語りにも異なった傾向が見られるだろうと考えて、この二つの社会を選んだ。

3.2. 調査協力者

本研究では事例研究として、日本調査ではベトナム2名、韓国、イラン、日本人帰国子女各1名である一方、豪州調査では日本人5名を対象とした。日本人を対象にしたのは従来から英語能力が相対的に低く言語問題が多いと言われており、そうしたエスニシティの典型例として考えたからである（e.g. Neustupný 1985）。表1に調査協力者のプロフィールをまとめた。調査協力者10名は、滞在数年の短期滞在者、滞在7年ほどの中期滞在者、そして10年以上の長期滞在者または移住者に分かれており、事例研究であっても主流言語に対する自己評価とアイデンティティの捉え方の大まかな変化を比較することは可能なように思われた。このうち、日本調査の短期滞在者の2名については評価の変化を通時的に見るため1年1回のインタビューを実施した（ソジュンには3年、ホアには4年。表1の2人の滞在期間は第1回のインタビュー時を指す）。また、豪州調査でも移住者の3名（クミ、シンジ、マヤ）には約2年後に追加調査を行った。なお、名前はすべて仮名である。

表1 調査協力者（日本調査、豪州調査）

日本調査			豪州調査		
協力者	出身地、性別、身分、滞在年数、年齢	使用言語	協力者	出身地、性別、身分、滞在年数、年齢	使用言語
ナム	ベトナム、M、大学院生、7年、20代	ベトナム語、日本語、英語	クミ	日本、F、サービス業、13年、40代	日本語、英語
キョウコ	日本（ブラジル育ち）、F、市職員、帰国20年、40代	ポルトガル語、日本語、英語	シンジ	日本、M、会社員、7年、20代	日本語、英語
サーム	イラン人、M、運送業、25年、50代	ペルシア語、日本語	ノリオ	日本、M、教師、17年、50代	日本語、英語
ソジュン	韓国人、M、学部生、1年、20代	韓国語、日本語	マヤ	日本、F、会社員、17年、40代	日本語、英語
ホア	ベトナム人、F、学部生、2年、20代	ベトナム語、英語、日本語	サヨ	日本、F、主婦、3年、40代	日本語、英語

以下、インタビューをもとに各協力者のプロフィールの概要を簡単にまとめる。

［日本調査の調査協力者］

ナムは、私費留学生として関東の大学の工学部に入学し、調査時、大学院修士課程の2年目に在籍

していた。日本国内の企業への就職が内定しており、将来は日本とベトナムの架け橋になりたいと考えている。

ホアとソジュンは滞在期間が数年の短期滞在者である（ホアのプロフィールは、5.1 節を参照）。ソジュンは韓日の学生のための国費プログラムで半年の日本語教育を受けた後、関東の大学の工学部に進学した。日本語に苦手意識が強い一方で韓国人留学生サークルに参加したりしていた。

長期滞在で移住者と言えるのはキョウコとサームである。サームは 50 代で、出稼ぎ労働者として来日してから 25 年になり、現在は運送会社やレストランの経営をしている。日本語は仕事をしながら独学で習得した。キョウコは 20 歳までブラジルに住んでいた帰国子女である。12 歳で一時帰国したときに日本語が出来ないことに衝撃を受け、アイデンティティの危機を経験した。20 歳のときに単独で帰国して現在は地方都市の国際交流職員の仕事を得ていた。

［オーストラリア調査］

長期滞在者または移住者は、クミ、マヤ、ノリオ、シンジである。クミは学生時代に渡豪し、永住権を得た後、個人で事業を始めた。事業をしている中でトラブルに巻き込まれて何度か民事裁判を経験していた。マヤは日本で知り合ったオーストラリア人配偶者の帰国に伴って移住した。その後生まれた子供とのコミュニケーションが自然に日本語になったことから、次第に自身のなかで日本語の比重が増えたという。一方、ノリオは日本の米軍基地などで日本語教師をしていたが、退職後にオーストラリアに移り、日系企業のオーストラリア人社員のために日本語を教えている。（シンジについては、5.2 節を参照）

短期滞在者のサヨは、日本人配偶者の海外駐在に伴ってオーストラリアに住み始めた。もともと駐在期間は 3 年と決まっているため、その間、英語学習を進めたいと考えていたが、望み通りには進まなかったと語っていた。

3. 3. 調査方法

本調査では、以上の 10 名について 2 種類のインタビュー・データを収集した。一つは、言語バイオグラフィー・インタビュー（Denzin 1989、Nekvapil 2003）で、本人の言語学習歴の語りから事実的な事柄、主観的な事柄、インタビューのテキスト的な事柄（e.g. 調査協力者が進んで語ったか否か）を明らかにする方法であり、もう一つのインターアクション・インタビュー（ネウストプニー・宮崎編 2002）では、ここ最近の具体的なインターアクションにおいて言語使用でどのような問題が起き、どのように評価をしたかを抽出することを試みた。加えて、以上の 2 種類のインタビューはどちらも半構造化インタビューの形式であるために、調査協力者が過去から現在の自分、そして将来の望ましい自分に関して語ることも含まれていた。こうした語りはアイデンティティに関する語りとして抽出することとした。

3. 4. 分析の枠組

本節では、分析の対象とした主流言語の言語能力・言語使用についての自己評価、自己評価の対象となった 3 領域、そしてアイデンティティの分析について説明する。

1）言語能力・使用に関する要約的な自己評価

村岡（2019）では自己評価を要約的評価と項目的評価に分類した。例えば「今でもあまり上手じゃないです」という評価の語りは具体的な場面や活動に位置づけずに現状を語った要約的評価の例であり、「特殊な撮影依頼がくると困ります」という語りは、場面が特定化された語りであり、項目的評価としている（同上、p.96）。本稿のデータでは個人の原則やストラテジーが語られる要約的評価を中心に分析する。評価の語りの抽出に当たっては、能力、得手不得手、善し悪し、習得の進捗の有無、後悔など何らかの評価と関わる要素が語りのモダリティに現れる場合に注目した。

2）評価の対象となった3領域

調査協力者が語る自己評価は主に次の3つの領域を対象に行われていることが明らかになった。さらに調査協力者によって自己評価の対象領域の範囲は1つから3つまで異なりが見られた。（これらの対象領域の詳細な説明は4.1を参照）

1）接触場面でのコミュニケーションの領域

2）自分自身の目的に応じた社会参加の領域

3）言語能力の獲得の領域

分析にあたっては、言語管理理論のプロセスの枠組（Neustupny 1994）を採用し、対象領域ごとにどのような自己評価（肯定的、否定的）の傾向があるか、またその自己評価の基準は何かを見ていく。言語管理理論では、人々は言語行動をするに際してその場で採用される規範・期待からの逸脱を留意し、評価し、調整実施を行うプロセスがあることを想定する。言語能力・言語使用の評価はそうしたプロセスの一つであるとする。

3）アイデンティティ

主流言語についての自己評価の語りには、主流社会との関係や将来の可能性といったアイデンティティが色濃く反映されていた。本稿でもアイデンティティを「自分自身と社会との関係の理解、時空間を横切ったその関係の構築の過程、将来の可能性の理解」（Norton 2000, p.5）として、調査協力者の自己評価との関わりを考察することとした。

以上の分析の枠組みによって、外国につながる人々がホスト社会での接触経験の蓄積をもとにどのように自らの言語、社会関係、アイデンティを評価し、管理しようとしているかを明らかにし、人々の言語レパートリーの概要を捉えていく。

4. 自己評価

4.1. 対象領域ごとの要約的評価の傾向

まず日豪の調査から自己評価の概要を簡単にまとめる。日豪合わせて10名の自己評価の語りは126件（うち日本調査で62件、豪州調査で64件）であった。ただし、すでに述べたように両調査ともに複数回調査を行った場合があり、量的な比較はできない。ここでは両調査の10名の大まかな傾向を自己評価の3つの対象領域について述べるに止める。

(1) 両調査ともに自己評価の語りが最も多かったのは接触場面のコミュニケーション領域の否定的評価であった。ただし日本調査のほうが場面の規範を基準とした逸脱がより多く否定的に評価される傾向があった。

(2) 社会参加の対象領域では、調査協力者は、自分なりの社会参加の目的が達成されているかどうか（e.g. 承認欲求、居場所）を基準として自己評価をしていた。両調査ともに、肯定的評価が否定的評価よりも多かった。特に豪州調査ではすべて肯定的評価で占められていた。つまり本研究の調査協力者の多くは本人が望んでいる社会参加を一定程度、達成できた人々であったと考えることができる。

(3) 言語獲得の対象領域では、調査協力者は日本語教室に通ったり、自分なりに習得のための努力を行うなど、言語獲得のための投資（e.g. Norton 2000）に見合った言語獲得の成果がでているかどうかを基準として評価していた。日本調査では肯定的評価の方がやや多く、豪州調査では否定的評価の方がやや多かったが、必ずしも明確な違いは見られなかった。

4.2. 対象領域の広がりに基づく自己評価の傾向

すでに述べたように、要約的評価であげた3つの対象領域は、調査協力者が認知し評価した言語問

題の各領域でもある。ここでは要約的な自己評価の語りが、対象領域が1つに止まっているか、2つまたは3つの対象領域にまで拡がっているかによって以下のようにグループ分けをして、それぞれの傾向を見ていく。

言語能力の獲得の領域のみ：（日）ソジュン、（豪）サヨ
言語能力の獲得＋社会参加の領域：（日）キョウコ、（豪）ノリオ、クミ
3つの対象領域すべて：（日）ナム、サーム、ホア、（豪）マヤ、シンジ

4.2.1. 言語能力の獲得の領域のみが語られる場合

滞在期間が短期にあたるソジュンとサヨは、要約的評価も共通して言語能力の獲得という対象領域だけに現れていた。つまり、言語獲得の問題が、他の領域に比べて顕在化しており、言語獲得に対する投資が集中していたことを示唆している。

［例1］ソジュン：日本語のほうは、1年、もう日本に来て2年にたつんですけど、（中略）むしろ何か下手になって、しゃべるのがにくくなったので。

［例2］サヨ：できるだけネイティブな英語にしたいなってところにも行きつかず、もう全くかな。

例1でソジュンは自分の日本語能力が落ちていると否定的な評価を下していた。また、例2では、サヨは英語母語話者の英語を目標としていたが、まったく到達できないと否定的に評価して、言語獲得に対する投資が実を結んでいないことを指摘していた。なお、要約的評価が1つの領域に限られていたのに対して、項目的評価は複数の領域に拡がっていた。滞在期間が短いために、経験を総括するよりも、経験する個々の出来事での評価を語ることが多くなっていたと思われる。

4.2.2. 言語能力の獲得＋社会参加の2つの領域が語られる場合

二つの対象領域に要約的評価の語りが現れた3人はいずれも10年以上在住している人たちであった。1つの対象領域は言語獲得の領域で、いずれも言語能力の獲得に否定的であった。例えば、キョウコとノリオの語りでは、言語獲得に向けた投資の限界が示唆されており、十分な言語能力の実感を持てないまま生活していることがわかる（例3と例4）。一方、クミの場合には言語獲得のための投資そのものをしていないがために英語能力が「進歩していない」と述べた。

[例3] キョウコ：今でも家族同士でも私は日本語が一番弱いんですね。

[例4] ノリオ：（テレビ・ラジオの聴き取りについて）これからいくら頑張ってもできないなっていうね、ちょっと諦めの気持ちは正直ありますよね。

もう1つの要約的評価は3名とも社会参加の領域であったが、キョウコと豪州調査の2名とで対照的な語りが現れた。キョウコは20歳のときに帰国して働き始めた頃の自分の日本語能力を「基本の基本」と否定的に評価しており、その後も仕事では特に敬語などが思うように使えず客から罵倒されるなど、本人が望むようには社会参加が成功していなかったことが語られていた。一方、ノリオとクミは社会参加について肯定的であった。ノリオはオーストラリアの移民社会では英語のバリエーションが多く、自分の英語でも「怖じけずに話せる」と語り、社会参加がしやすいことを示唆していた。クミの場合は、英語は「問題があるかもしれないけども、なんかそこに時間使ってらんない」一方で、「お金もらえるんで」と語られており、言語獲得への投資や言語使用の逸脱を気にするよりも、仕事（= 社会参加の目的の達成）を重視する姿勢が語られていた。つまり、社会参加が成功していれば言語獲得の問題は弱まることが示唆されていると言える。

以上のような社会参加の領域でのキョウコとノリオ、クミの正反対の評価は、両調査のほかの調査協力者の語りにも見られた。オーストラリアと日本の社会参加のしやすさの相違がこのような正反対の評価をもたらしたと考えられる。

4.2.3. 3つの対象領域すべての評価が語られる場合

短期滞在のホアと、滞在期間が中長期にわたる4名の語りには要約的な評価が3つの対象領域すべてで現れていた。特徴的なことは5名全員とも社会参加の領域で肯定的評価を語っていることであった。例えば、ナムは日本語での学会発表などの社会参加の目的が達成できていることを「自信がある」と表現している。

［例5］ナム：日本語を使う場面で、やっぱり勉強だと、自信があるのはやっぱり、例えば学会発表あるときに色々調べておいて、色々発表練習とかしたりすると、発表するときに自信がありますね。

また、社会参加の対象領域以外で否定的であったとしても、それらは大きな問題としては意識されていない。例えば、サームは日本語能力の全般的な不足を否定的に評価する一方、日本語は「自分の仕事では問題がない」と語り、会社経営の成功という社会参加の目的が達成できていることから、日本語能力の問題が不都合を生じさせていないことを語っていた。日本語能力の全般的な不足という言語問題は、クミと同様に社会参加の成功によって補われていると言える。

こうした社会参加の成功が優先される傾向は、豪州調査のマヤとシンジの場合にも当てはまる。

［例6］マヤ：変な英語話してても、うん君が言ってることはわかるよっていうレベルの英語しか話してなくても、それでやっていけるから疲れないし、それじゃわからないわって無視されるわけじゃないし、だから住みやすいところなのかもしれませんね。

オーストラリア人と国際結婚をして二児の母となっているマヤは、夫、夫の両親などとの家庭領域や仕事領域などで英語を使用する機会が日常的にある。そこでは自分なりの英語を使ってコミュニケーションをとっており、それに対してホスト社会側が否定的に評価しない。マヤはそのために「住みやすい」と述べて、自分が周囲の人々に受け入れられていることを示唆していた。言い換えれば、社会参加の成功が、英語能力の獲得の問題を弱めていると考えることも出来る。

以上のように3つの対象領域で要約的評価が見られた調査協力者の場合にはすべての要約的評価の基盤に社会参加の領域での肯定的評価があった。つまり、程度の差はあれ、望ましい社会参加が達成できており、それによって残りの対象領域の言語問題は軽減されることが示唆されたと言える。

5. 事例から見るアイデンティティの管理

前節で明らかになったように、自己評価において社会参加の重要性が認識されてているということから示唆されることは、主流言語の自己評価とホスト社会との関係構築とが深く影響を与え合っているということのように思われる。本節ではアイデンティティ、つまり「時空間を横切ったその（ホスト社会との）関係の構築の過程」、さらには「将来の可能性の理解」（Norton 2000）の語りを抽出し、調査協力者がどのようにホスト社会との関係性を管理してきたかを分析したい。紙幅の都合により本節ではホアとシンジの事例を取り上げる。

5.1. ホアの事例

4.2.3節で述べたように、ホアは3つの領域で要約的評価をしていた。本節では接触経験が蓄積され振り返ることが可能になった時期にあたる3、4年目のインタビューの語りを中心に事例を見ていくことにする。

ホアは2013年に来日して日本語学校で留学準備をし、2015年に首都圏の大学に入学した。しかし、1年目はアルバイト先と大学の往復だけで、自らの居場所が見つけられず、日本語では自分らしく自己を表現することも許されないとも感じていた。悩みを相談できる日本人の友人も出来ないため、学内のカウンセリングに定期的に通うようになった。ホアは将来の別な国への海外留学も視野に入れて自分の得意な英語の文化資本を活用することを考え、まずはキャンパス内の英語学習施設のチューター

の仕事をもらうことにした。それにより日本人学生との英語によるネットワークを構築するに至った。そして、ライフストーリー研究でエピファニー（桜井 2002）と呼ばれる人生の転機となった出来事が2年生の最後に参加した海外授業実習で起きた。海外実習は母国ベトナムで行われ、ホアは英語で授業をするだけでなく、ベトナム語と日本語を駆使することで、ベトナムの相手大学と日本人学生、日本人教師をつなぐ役を果たし、尊敬を獲得することになった。それだけでなく、日本人学生と一緒に暮らすことで、2年経っても出来なかった親しい友人ネットワークを2週間の実習でつくることができたと言う。以上のような「自分の人生にとって大きな出来事だった」と自ら言う接触経験を経て、3回目のインタビューでは、言語獲得、アイデンティの変容が語られることになった。

ホアはインタビューの1回目、2回目で語っていた友人ができない悩みについて回想しながら、3回目の時には次のように述べている。

［例7］あれ（友達づくり）で困ってたんですけど、今は別に悩みって（カウンセリングの）先生に話す機会があるから（笑）、別に話さなくていいじゃないかって自分で解決するとかそういう手もあるんですから。

ホアは、入学後、友人と悩みを話し合える関係を求めていたが、日本での「友人」が必ずしもそうした関係性を含むわけではないことを理解したことで、問題を解消したものと考えられる。

ただし、海外授業実習グループのネットワークが出来たことによって、問題が軽減された可能性もある。海外授業実習グループの日本人学生たちは、ホアの日本語使用の逸脱に対して否定的な評価をするようになった。そのため、ホアは自分の日本語の獲得に「すごい自信なくなってきました」と言い、自分の日本語能力を否定的評価をする語りが見られた。そもそもこうした日本人学生たちによる否定的な評価は、親しい関係以外では直接言われることが少ない。「仲間にすごく言われる」と語っているように、ホアは友人たちの否定的評価について報告すると同時に、本音で話してくれる「仲間」との人間関係を肯定的に評価しているとも解釈できる。

一方で、ホアは自分自身の言語管理について次のような変化を語った。

［例8］前は結構頑張って変えたんですけど、話すときもいつも意識して自分のトーンとかを変えたりしてるんですけど、今は別に、こっちのほうが、私が話したら、みんな私だなって思うんですね、すぐわかるから。そっちのほうがいいなと思いました、最近。

以前は日本語の規範に逸脱しないように事前に調整をしていたホアであったが、現在は、「トーン」の逸脱を自分らしさとして肯定的に評価し、調整しないという選択をしている。つまり、ホアは友人グループの形成を社会参加の一つの達成として肯定的に評価した上で、日本語使用の逸脱の一部については否定的に評価せず、自分らしさのアイデンティティの表示であるという原則を形成するに至ったものと解釈することができる。

さらに例9では自分のアイデンティティを「ホア星人」であると述べている。

［例9］いつも考えてて、自分のアイデンティティってすごい大事にしているんですけど、自分はベトナム人って言われてもそこまで、ベトナム人とは何かって思って、自分の中に回答がわからないのがあるし、日本人といっても日本人じゃないし、英語しゃべれるから英語圏の文化も結構影響受けてはいるんですけど欧米人でもないし、何だろうと思ったら、自分はホア星人だと自己紹介してます（笑）

例9が示唆していることは、ホアが出身国の属性よりも自分の個性を承認してもらうストラテジーを運用し始めたことだと思われる。きっかけも、やはり海外授業実習であった。3言語を使いながら、ホアは周囲の日本人学生や教員、またベトナム人の中で「自分もすごい個性がある人」であることを強く意識したと言う。他方で「日本語と英語とベトナム語が話せる人っていうアイデンティティが強すぎて、それ以外の私はみんな見えないんですね」と述べており、多言語話者としてのアイデンティティだけが強調されることにも抵抗があった。「ホア星人」というアイデンティティの提示には、友人

グループの形成にともなう社会的位置づけの変化をもとに、望ましいアイデンティティとしての個人の提示へと至ったものと考えられる。

5.2. シンジの事例

シンジには、社会人2年目（豪滞在7年）の時とその2年後の2回インタビューを行った。言語バイオグラフィー・インタビューでは、日本の高校を卒業後に来豪し、英語学校で2年半、必死に英語を勉強した後、大学に入学したこと、大学在学中は英語母語話者とのネットワーク構築に努力したこと、大学卒業後、両親に反対されながらも全くコネもないオーストラリアに残って生きていく決意を固めたこと、そのために永住ビザを取得し、現地の日系企業に就職したことを語った。その後、転職し、2回目のインタビュー当時、別の日系企業の豪州支社で日本の本社と現地の仕入れ先業者をつなぐ仕事に従事していた。

4.2.3節で述べたように、ホアと同様にシンジにも要約的な評価が3つ全ての領域に現れている。他の調査協力者にない特徴として、社会参加と言語獲得の両方の領域で肯定的評価を多く語り、それが彼自身の社会的位置づけに関連していること、一方、インターアクションの領域では、否定的な語りが項目的なものを含めると少なくないことである。

1回目のインタビューでは、オーストラリアへの留学を勧めてくれた高校の恩師との出会いが彼の人生の転機になったことを語った。

［例10］（自分の英語をオーストラリア人の英語に近付けようとする意識が）いつもあったと思いますね。その方（高校の恩師）に、あの、僕がここに来る前に、ひとつ言われたことがあって（中略）ちゃんとここで生まれた人の、純粋なここでの英語っていうものを慣れてほしいと、（中略）最初、僕はほんとにこっちの英語で、やっぱりこっちの人になるぞじゃないですけど、やっぱりそういうような意気込みでこっちに来たんで。

この例からは、渡豪直後から自分自身の英語をネイティブスピーカーの英語に近づけようとするために、言語獲得への投資を継続していたことがわかる。また、「こっちの人になるぞ」で表現されるようにホスト社会の一員になろうとした当時の強い意志も読み取れる。

2回目のインタビューで、社会人となり4年経過した今もこのような英語に対する投資を持ち続けているのか尋ねた。

［例11］最近はもう何か日本人の友達が作りたくないってことは思わないですし、ただでも、（中略）そうするとやっぱりね、どうしても英語が出なくなってくるんですよね。ちょっとそれはすごく怖くて、それこそ、でも、僕の場合は彼女がこちらの英語を母国語としている人なので、（中略）帳尻を合わせるみたいなところはあったと思いますよ。

つまり、日系の企業に就職してからは、日本人の同僚とのコミュニケーションも多いので、英語のネイティブスピーカーの友達とのコミュニケーションを増やし、英語への投資を継続していると言える。また「英語が出なくなるのがすごく怖い」と上で述べているように、大学卒業後にオーストラリアで一人で生きていく選択をしたシンジにとって、英語という文化資本がいかに重要であるかが読み取れる。彼は英語を「人を理解し、人をつなぐ重要なコミュニケーションの方法」と認識し、「人との関わりで学んできた」と述べた。実際に、学生時代の友人や職場での英語使用のネットワークを広げ、維持し、ホスト社会への参加も順調であることが明らかになり、シンジの英語への投資が報われていることがわかる。言い換えれば、語学学校時代からの長年の英語への投資に見合った英語力向上、その結果として社会的ネットワークの発展があり、それが彼の言語獲得の領域での肯定的な自己評価につながっていると言えるだろう。

また、職場では、日・英ともにコミュニケーション上の様々な問題にぶつかった経験が語られ、それがコミュニケーションの領域での否定的な評価につながっている。その際には、複数のストラテジー

が活用されていることも判明した。例えば、仕入れ先業者と電話で連絡を取り合う際には、現地の業者の強いアクセントのため必要な情報が聞き取れない問題が生じることがあり、その際には、同じ情報を建前上は「みんなと共有したいからメールで送ってくれ」と頼むストラテジーを使っていた。更に、日本の本社の上司とのメールや電話のやり取りにおいても、ビジネス場面にふさわしい日本語が使えないという規範の逸脱に留意していた。

しかしながら、それらの問題や逸脱に対する彼の否定的な評価は社会参加の成功によって補われていると分析できる。

［例 12］日本の本社の方で冗談半分でからかわれて「彼（シンジ）は日本語下手だね」って言ったということは聞きましたけれどね。でも、それはそれでいいんじゃないかな、（中略）「彼（シンジ）は日本を離れて 8、9 年だから多少日本語がわからなくてもいいんじゃない」と日本側は考えてくれるし、オーストラリアのサプライヤー（仕入れ先業者）側も「彼は日本人だから完璧な英語をしゃべれなくてもいい、それでも僕らは理解しなければいけない」ぐらい思ってくれていると思う、僕はちょうど中間にいて、おいしいところだけ持って行ける。

ここでは、継続した英語への投資によって得た、自分自身のバイリンガル・スキルという文化資本を職場で生かしていくなかで、「日・英ともに完璧じゃなくてもいい」という原則が形成されたと考えられる。また、この原則は上の例の「中間」という言葉に象徴される日本の本社と地元の仕入れ先業者をつなぐ仲介者というシンジの職場コミュニティーにおける位置づけにも関連していると考えられる。

また、3.4 節で述べたようにアイデンティティには、社会に対して自分を将来的にどう表示したいのかというものも含まれるが、次の例はそれを示している。ここでは、シンジは日本人が「自分を殺して溜め込んでしまう方が多い」のに対して、オーストラリア人は「真逆で嫌なものは嫌って言える」と対照した後、次のように語った。ここでもシンジの社会的位置づけに深く関連すると思われる「中間」という言葉が出てくる。

［例 13］その（そのような特徴をもつ日本人とオーストラリア人の）中間っていないのかな？（笑）僕の周りだけなのかもしれないですけど、そんなにいないんじゃないかなと思って。なんかこう両方を受け入れられるような、（中略）こうバランスよく、うまいことやって行きたいっていう。そういうことってとても必要だと思うんですよね。

つまり、日本とオーストラリアの文化的な違い、コミュニケーションの仕方の違いを理解し、その両方を受け入れ、円滑なコミュニケーションができる、仲介者としての新たなアイデンティティを構築しようとする意志が読み取れる。

6. 考察：外国につながる人々の言語レパートリーの方向性

前節までで明らかになったことは、外国につながる人々は、移動先の現地の人々と接触を繰り返すなかで、日々のコミュニケーションの規範からの逸脱を評価し、自らの目的に応じた社会参加の成否を評価し、さらに必要となる言語能力の獲得を目指した投資の成否を評価していた。また彼らは、ホスト社会の人々との接触から与えられる言語環境的な条件だけでなく、社会参加の目的や言語学習への投資などの自らの意思による選択によっても、多様な評価を行っていることが明らかになった。こうした自己評価によって、外国につながる人々はさらに自らの社会的位置づけを確認し、将来に向けたアイデンティティの形成を試みていたと思われる。

以上の結果をもとに、調査協力者 10 名について示唆される言語レパートリーの方向性を考察する。言語レパートリーは、先に述べた多面的な自己評価と、アイデンティティについての語りに見られる将来の望ましい自己のあり方や限定的な参加の原則によって、日々、言語リソースや社会言語的リソー

ス、コミュニケーションのスタイルが選択され、形成されていくプロセスとして考えることができるように思われる。

言語レパートリーの形成にとってまず第一に重要なことは、社会参加の評価が言語能力・使用の評価のなかで最も重要であるということである。社会参加の領域で肯定的に評価している人々は、コミュニケーション領域での規範からの逸脱という問題を軽減あるいは潜在化させていた。このことが示唆するのは、言語レパートリーにおける日本語または英語のリソースは体系的であるよりは実践的であるということである。日本調査のサームや豪州調査のクミ、マヤがこの典型である。またシンジとホアの事例では、英語・日本語使用の不完全さを重視しない原則が語られ、この原則にはそれぞれのホスト社会の言語規範を緩和しながら、日々の社会参加の実践に文脈化された言語リソースとその用法が蓄積されていることが推測される。

こうした言語レパートリーの中心的な性格からは、3つのバリエーションが派生してくる。1つは、ホスト社会から距離を置く管理が行われる場合である。前節までには紙幅の関係で述べなかったが、ナムは「ため口」によるコミュニケーションを「自分にはふさわしくない」と評価して、参加を回避していた。つまり、社会参加を肯定的に評価することは、ホスト社会の人々と同じように参加することを必ずしも意味していない。彼らは自らの社会参加の目的を吟味しながら必要と認めないコミュニケーションには参加しない管理も行っている。その結果、当然のことながら日本語や英語のリソースもまたある領域やジャンルに偏って蓄積されることになる。

2つめは、社会参加の目的が達成されているにもかかわらず、言語能力・使用の自己評価が否定的なまま問題が顕在化し続けている場合である。豪州調査ではノリオ、シンジ、日本調査ではキョウコ、ホアがそうした例にあたる。これらの人々に共通していることは、そうした問題は一局面の言語能力に限定されていることである。例えば、ノリオの場合にはメディア領域での聞き取り、シンジはビジネス交渉での聞き取りであった。またキョウコの場合には場面に適切な敬語などの表現であった。言語能力・使用に対する否定的評価が継続される結果、問題化している言語能力の局面に対しては継続的な注意が払われると考えることができる。そうした局面の日本語あるいは英語のリソースは習得の対象となり修正されていく可能性がある。

3つめは、アイデンティティの形成と関係する。5節のシンジとホアの事例では、移住後、主流言語の獲得に集中していたが、その後は社会参加の問題を解決するために複言語の文化資本を活用したこと、それにより周囲の人々から肯定的な評価を受けたことで共通していた。そして、それぞれのホスト社会の主流言語に関しては、言語的逸脱をむしろアイデンティティとして承認してもらう交渉が行われていたと言える。このことは、言語レパートリーに含まれる主流言語の言語規範やコミュニケーション規範が緩和されたり、独自な規範が生成されたりする、などの方向に向かう可能性が見られると言える。

最後に付け加えることとして日本調査と豪州調査ではいくつかの相違点が確認された。外国につながる人々の社会参加の難易度が2つの社会で異なり、それがインタビューの語りに反映されていた。しかし、両調査の人々の接触経験の管理、その結果としての言語レパートリーの形成のプロセスには共通した要因が多く認められた。ただし、本研究は限られた外国につながる人々を扱ったものであり、今後も引続き、調査を広げていくことが求められる。

7. おわりに：言語政策への示唆

3.2節で述べたように、本稿の目的は、10名の外国につながる人々の言語レパートリーの多様性とアイデンティティを分析することだけでなく、彼らにとって主要な言語問題の1つである主流言語との関わり方を明らかにし、移民に対する言語政策への示唆を得ることも含まれる。最後に3つの点を

指摘して本稿を終えたい。

(1) 外国につながる人々は主流言語の規範からの逸脱を必ずしも否定的に評価せずに、それを軽減あるいは潜在化させる一方で、社会参加の目的の達成をより重視する傾向があった（6節参照）。つまり、社会参加を肯定的に評価することは、ホスト社会の人々と同じように参加することを意味していないということは言語政策を考える上で留意が必要である。

(2) 社会参加の問題を解決するために複言語の文化資本を活用し、ホスト社会の主流言語に関しては、言語的逸脱をむしろアイデンティティとして承認してもらう交渉が行われた事例を紹介した。ここから見えてくることは、移民に対して、ホスト社会の人々と同様の規範や言語能力の習得を奨励するのではなく、移民の持つ文化資本が活かされ、所属意識が持てるコミュニティーの構築、より柔軟でインクルーシブな社会参加を可能とするような取り組みや指針を検討していくことの重要性である。

(3) 村岡（2019）は、多言語社会における言語政策においては、個人レベルの言語問題とそのアイデンティティとの関連の綿密な調査から始めるボトムアップ・アプローチを取ることの必要性を指摘している。本稿で調査協力者10名のそれぞれ異なる言語使用・能力の評価とアイデンティティの分析で示したようなボトムアップ・アプローチによる調査は、地方公共団体レベルにおける移民や外国人居住者に関する言語施策を検討していく上で重要な知見を与えることが期待される。

付記

本稿は、2017年3月、社会言語科学会大会における口頭発表とその際おこなわれた討論に基づき、新たな分析考察を加えて論文としてまとめたものである。（村岡英裕・倉田尚美「日豪における移動する人々の言語レパートリー調査―社会ネットワークへの参加の文脈に焦点を当てて―」・社会言語科学会第39回大会・2017年3月18日・杏林大学・大会発表論文集66-69）

文献

岩﨑典子（2018）「ハーフの学生の日本留学」川上郁雄・三宅和子・岩﨑典子（編）『移動とことば』くろしお出版、16-38.

宇佐美洋（2008）「学習者の日本語運用に対する，日常生活の中での評価－個人の「評価観」の問い直しのために必要なこと」『日本言語文化研究会論集』4、19-30.

外務省（2021）「海外在留邦人数調査統計令和4年版」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/index.html（2022年9月11日閲覧）

川上郁雄（2011）『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版

川上郁雄・三宅和子・岩﨑典子（編）（2018）『移動とことば』くろしお出版

Kurata, N. (2011) *Foreign language learning and use: Interaction in informal social networks*. London: Continuum.

倉田尚美（2018）「移動する青年のことばとアイデンティティ」川上郁雄・三宅和子・岩﨑典子（編）『移動とことば』くろしお出版、16-38.

桜井厚（2002）『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房

出入国在留管理庁（2022）「令和3年末現在における在留外国人数について」
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00001.html（2022年9月8日閲覧）

総務省（2006）「地域における多文化共生推進プラン」
https://www.soumu.go.jp/main_content/000770083.pdf（2022年9月8日閲覧）

総務省（2019）「多文化共生の推進」
https://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/chiho/02gyosei05_03000060.html（2022年9月8日閲覧）

ネウストプニー，J.V.・宮崎里司（2002）『言語研究の方法―言語学、日本語学、日本語教育学に携わ

る人のために』くろしお出版
三宅和子（2018）「国際結婚家庭2世代の「移動」と「選択」」川上郁雄・三宅和子・岩﨑典子（編）『移動とことば』くろしお出版、126-148.
村岡英裕・ファン、サウクエン・高民定（編）（2016）『接触場面の言語学―母語話者・非母語話者から多言語話者へ』ココ出版
村岡英裕（2019）「移動する人々の語りからみる言語問題―ボトムアップ・アプローチによる言語政策のために―」『社会言語科学』，22(1)，91-106.
八木真奈美（2018）「移住者の語りにみられる「経験の移動」が示唆するもの」川上郁雄・三宅和子・岩﨑典子（編）『移動とことば』くろしお出版、171-189
山下晋司（2010）「2050年の日本－フィリピーナの夢をめぐる人類学的想像力」『文化人類学』，75(3)，327-346.
Australian Bureau of Statistics.（2021）*Census 2021*. https://www.abs.gov.au/census
Berry, John W.（1997）Immigration, acculturation and adaptation. *Applied Psychology*,46, 5-68.
Bourdieu, P.（1984）Linguistic capital and market. *Linguistische Berichte*, 90, 3-24.
Clyne, M.（1991）*Community Languages: The Australian Experience*. Cambridge: Cambridge University Press.
Denzin, N.（1989）. *Interpretive Biography*. Newbury Park, CA: Sage Publications.
Nekvapil, J.（2003）Language biographies and the analysis of language situations: on the life of the German community in the Czech Republic. *International Journal of the Sociology of Language*, 162, 63-83.
Neustupný, J. V.（1994）Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. & Kwan-Terry, J.（eds.）, *English and language planning: A South-east Asian contribution*, 50–69, Singapore: Academic Press.
Neustupný, J.V.（1985）Problems in Australian-Japanese contact situations. In Pride, J. B.（ed.）, *Cross-cultural encounters: communication and miscommunication*. 44-84. Melbourne: River Seine.
Norton, B.（2000）*Identity and language learning: Gender, ethnicity, and educational change*. Harlow, UK: Pearson Educational/Longman.
Vertovec, S（2007）New Complexities of Cohesion in Britain: Super-diversity, transnationalism, and civil-integration. Commission on Integration and Cohesion. Queen's Printer and Controller of Her Majesty's Stationery Office. https://www.compas.ox.ac.uk/wp-content/uploads/ER-2007-Complexities_Cohesion_Britain_CIC.pdf（2022年9月18日閲覧）

A Case Study of Diversity of Linguistic Repertoires and Identities among People Connected to Foreign Countries in Japan and Australia: Analysis of the Self-evaluation of Language Proficiency and Use and Implications for Language Policies

KURATA Naomi, MURAOKA Hidehiro

Keywords: linguistic repertoire, contact situations, language management, self-evaluation, identity

Abstract

Backgrounds of increasing numbers of immigrants represent "superdiversity" (Vertovec 2007) and in sociolinguistics, attention has been paid to immigrants' individual linguistic repertoire. By interviewing such people, we aim to examine how they self-evaluate their proficiency and use of their host society's dominant language through their contact experiences with the host society, how they construct their identities, and to reveal part of how their linguistic repertoire is formulated. The narratives of 10 participants were analysed regarding their proficiency self-evaluations and identity. We found that overall, there were more similarities than differences in the trends of their self-evaluation of their host language proficiency and use in both countries. The results on their identity indicate a close relationship between the participants' identities and their contact experiences in their host society. Moreover, we claim that the participants' narratives on identities allow us to predict the direction of their linguistic repertoire construction. This type of in-depth examination of individuals' repertoire will give us an important suggestion when we consider concrete language policies towards immigrants.

（倉田尚美：モナシュ大学、村岡英裕：千葉大学）